

# 東アジア・中央ユーラシアを取り巻く 最新の研究動向と『新詳 世界史探究』

東京大学 教授 杉山 清彦(すぎやま・きよひこ)



2022（令和4）年度から実施されている高等学校学習指導要領（以下、指導要領）において、新科目「世界史探究」が新設された。その大きな特徴は、一つは、大項目B「諸地域の歴史的特質の形成」の中項目（3）「諸地域の歴史的特質」において、東アジアが——オリエン  
トではなく——冒頭に配置されたことである。いま一つは、「中央ユーラシア」の語が初めて学習指導要領に採用されたことである。

この両地域は、学習上の配置だけでなく研究上の動向もまた、大きく動いている。ここでは、それがどのように『新詳 世界史探究』（以下、本教科書）に反映されているかについて、いくつかのトピックを取り上げて紹介したい。

## 1 東アジア・中央ユーラシアはどのような地域か

現行指導要領では、大項目B・中項目（3）の小項目ア（ア）・イ（ア）において、「東アジアと中央ユーラシア」の歴史的特質を理解することがねらいとして掲げられている。あらためて確認するならば、湿潤な周縁部と乾燥した内陸部からなるユーラシア大陸のうち、季節風が作り出す湿潤な東部と、それと一部重なり合う広大な内陸の乾燥域とが、東アジアと中央ユーラシアである。

東アジアの特徴は、湿潤な気候の下での農業の発展とそれによって支えられた巨大な人口、そしてそれを治めるために発達した制度・機構である。豊かな農業生産は、群を抜いて巨大な首都と宮廷・官僚機構・軍隊の給養を可能にし、それを動かすための画一的な行政制度や法制、税・労役の調達のための戸籍・税制・土地制度や交通体系の整備を促した。これが中国王朝の骨格をなし、さらに日本をはじめ近隣の諸地域にも移入された。

東アジアは南北に広がるため、北の畑作と南の稲作のように内部の環境や生業は多様であるが、そこにまとまりを与えていたのは、漢字とそれで記された価値・文化体系の共有であった。風土の相違や政治統合の経験の有無にかかわらず、広大な地域を漢字文化が結び付けてい

たのであり、その点で、東アジアとは漢字文化圏であったとすることができる。この歴史的な東アジアの範囲は、おおむね甘肅（河西）地方以東の中国大陆と朝鮮半島・日本列島・ベトナム北部とされ、現代とは異なることに注意しなければならない。

これに対し、共通性ではなく環境・生業・文化の多様性と全体の複合性によって特色づけられるのが、旧指導要領の「内陸アジア世界」に代わって現行指導要領で新たに登場した中央ユーラシアである。これは、ヨーロッパ（Europe）とアジア（Asia）を一つながりのものとして表すユーラシア（Eurasia）の語に示されるように、内陸アジア世界よりも広がりを持つ地域概念である。

乾燥した気候が優越するこの広大な範囲では、北から森林・草原・オアシスの三つの帯が東西に並走する。少ない人口しか養えない厳しい環境下、草原地帯では遊牧社会、砂漠地帯ではオアシス社会が形成され、この両社会の活動が歴史を動かす動因となってきた。とりわけスキタイ・匈奴に始まる遊牧国家は、中国の諸王朝をはじめ、西北インド、イラン高原、東ヨーロッパの歴史に大きな影響を与え続けた。すなわち中央ユーラシアは、それ自体が草原と砂漠、遊牧とオアシスによって特徴づけられる一つの歴史的地域であると同時に、周囲の諸地域を結び付け、またそれらと重なり合う巨大な地域でもあったのである（それゆえ、中央アジアよりもはるかに広い範囲をさす）。これを図式化したものが、2部1章3節「中央ユーラシアと遊牧国家」所掲の「**2** 中央ユーラシアの構造」（本教科書 p.30 および **図1**）である。

この巨大な地域のダイナミズムは、大小の南北関係と東西関係の組み合わせとして説明することができる。すなわち、中央ユーラシア内部での南北関係・東西関係と、中央ユーラシアと隣接

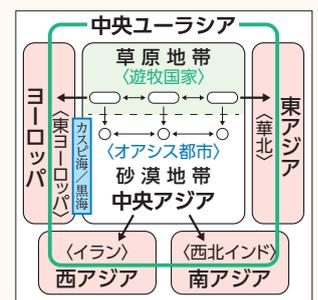


図1 中央ユーラシアの構造  
『新詳 世界史探究』p.30

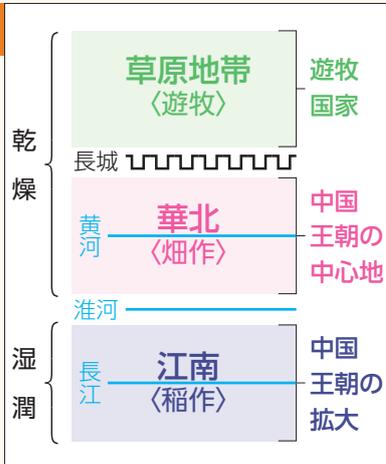


図2 ユーラシア東部の三重構造  
『新詳 世界史探究』p.39



図3 ユーラシア東部の三重構造における王朝の変遷(筆者作成)

地域との間の南北関係・東西関係という二重構造である。

内部における南北関係とは、北の遊牧勢力と南のオアシス定住社会との関係であり、東西関係とは、遊牧勢力同士、オアシス都市間それぞれの関係である。他方、外部との南北関係とは、モンゴル高原の遊牧国家と中国王朝や、西トルキスタンの軍事集団と西北インドなど、中央ユーラシアの勢力とその南方に隣接する社会との間の関係である。また外部との東西関係とは、いうまでもなくシルクロード貿易とよばれる国際商業が代表的である。

このような重層的構造理解は、歴代遊牧国家の興亡に代表される中央ユーラシアの歴史展開の系統的理解に有効であるだけでなく、これと重なりながら隣り合う周囲の諸地域をとらえ直す視点をも提供してくれる。

これまで、ユーラシアの周縁諸地域の歴史においては、漢字やキリスト教など固有の指標によって排他的に範囲を切り分けがちであり、その領域に中央ユーラシアの勢力が及んだときは「蛮族の侵入」としてとらえてきた。しかしそうではなく、中央ユーラシアのコア部分を独自の歴史的地域ととらえたいうえで、外周の華北・西北インド・イラン高原・東ヨーロッパを、中央ユーラシアとの二重の性格を持つ地域と見るのである。この二重地域は、中央ユーラシアと定住農耕社会どちらの勢力下に入ることもありえるわけであり、それを一方の世界の拡大と他方の縮小ととらえる必要はない。

このような図式を念頭に置きつつ、東アジアと中央ユーラシアの歴史的特質の理解に関わるトピックについて、いくつか具体的に見てみよう。

## 2 中央ユーラシアと東アジアの交差する構図をどうとらえるか

### ◆ ユーラシア東部の三重構造 (本教科書 p.39、122)

先掲の「[2](#) 中央ユーラシアの構造」を踏まえつつ、そのうち東アジア方面について、中央ユーラシアとの

関わりを念頭に置きながら構造を図式化したものが、5節「ユーラシアの変動と東アジア」で新たに掲げた「[2](#) ユーラシア東部の三重構造」(本教科書 p.39 および [図2](#)) である。これを使って、環境・生業面と政治・制度面の双方から、中央ユーラシア東部と中国大陸の歴史の展開を不可分かつ構造的に説明することができる。

具体的に見てみよう。ユーラシア東部は、一般的には万里の長城を境として中国とその北方とに区分される。しかし環境・生業面に着目すると、中国大陸は乾燥した華北と湿潤な華中・華南(その中心地域が江南)とに分けられる。歴史の展開を理解するには、長城以南を「中国」として初めから一体視するのではなく、遊牧の草原地帯を含めて、畑作の華北、稲作の江南からなる三重構造ととらえ、その組み替わりとして整理すると分かりやすい。この三つのブロックは、漢字文化と中国式統治体制の及ぶ範囲に注目すると長城線で分けられるが、畑作・粉食・牧畜が主体の乾燥地帯ととらえると、華北はむしろ草原地帯と連続性を帯びた地域と見なしうるのである。

これを歴史の展開に当てはめると、秦・漢は長城線を境として匈奴と南北に分立したが、魏晋南北朝時代は三つのブロックが分かれた時代といえる([図3](#))。すなわち、北のモンゴル高原に柔然・突厥(テュルク)といった遊牧国家、華北には遊牧系の出身で中国式統治体制を採用した北朝、そして江南には漢人亡命政権の南朝である。この間、北朝にとって軍事的脅威であったのは一貫して北の遊牧国家であり、他方、華北に侵攻する力をもたない南朝は、北方の柔然や周囲の吐谷渾・高句麗と結んで北朝に対抗しようとした。

このように5~6世紀のユーラシア東部は、大きく見ると南北朝というよりも三層構造をなしており、情勢は草原地帯の遊牧国家と華北の王朝との対抗関係を主軸として展開した。その下で、華北ではさまざまな遊牧勢力と漢人が、江南では華北からの移住者と江南住民が混じ

り合うことになり、それぞれの地域で新たな政治体制や文化が形づくられていったのである。

このような三層構造は、以後の時代にもしばしば表面に現れる。ウイグル・チベット・唐の滅亡後の、10世紀のユーラシア東方は、北方の遊牧国家キタイ帝国(遼)、トルコ系が多数を占める華北の五代諸王朝、十国と総称される華中・華南の地方政権という、三層の分立状況が再び現出した時代であった(本教科書 p.122 1)。

この状況はキタイと北宋の南北共存として続くが、12世紀初めに新興の金がこの両帝国を倒すと、組み合わせが変化する。すなわち金が北方の遊牧地域と華北の双方を押さえ(ただし、金を建てた女真人は遊牧民ではない)、江南によった南宋と淮河を挟んで分立した。そしてこの形勢は、遊牧地域から興ったモンゴル(元)が両者を滅ぼすことで終わり、ここに初めて北方の草原ブロックの勢力による三層すべての統合が達成されることになるのである。

このように、三層構造とその組み替わりをとらえることで、華北と江南の分断を「中国の分裂」として不正常的な状態のように見なしたり、同じ乾燥地帯である華北での遊牧民の活動を「北方民族の侵入」などとして対立や異質性を強調したりする旧来の見方から離れて、中央ユーラシアの波動と東アジアの展開とを連関させてとらえることができるであろう。また、このような図式は、〈西トルキスタン／西北インド／デカン地方〉や〈南ロシア草原／東ヨーロッパ／西ヨーロッパ〉のように、南アジアやヨーロッパの歴史展開の理解にも応用できよう。

#### ◆ テュルクとチベット(本教科書 p.36、40)

6～9世紀の中央ユーラシアの大国を、『新詳 世界史探究』では「突厥(テュルク)」「チベット(吐蕃)」とカナ並記で表記し、「突厥(テュルク)帝国」「ウイグル帝国」や「チベット帝国」などとよんでいる。これには二つの理由がある。

第一は、研究の進展によって原語が判明したことである。オルホン碑文とよばれる突厥文字碑文(本教科書 p.36 1)中では、政体や民族を指して「テュルクのカガン」「テュルクの民」などと記されており、突厥の自称がトルコを意味する「テュルク」という語であることが明らかになっている。このテュルクの複数形「テュルクキョト」を音写したのが、突厥という漢字表記である。またチベットは「プ」と自称し、周囲からは「トゥプト」、「トゥバット」などとよばれていて、これが西洋語のチベットの語源となった。その漢字音写が「吐蕃」である。

このように、原語や自称が明らかになっている場合、できるだけそれに従うことは学問的にも道義的にも原則であろう。とりわけテュルク(トルコ)やチベットは、自言語の表記に漢字を用いた朝鮮や日本と違って漢字文化を受容せず、漢字以外の文字文化を受け入れたので、漢字の当て字で呼称することは本来適切ではない。

特に、漢文史料での非漢人に対する漢字表記は意図的に蔑視的な文字が用いられているので、学習者・読者に差別意識を刷り込むことがないように慎重な配慮が求められる。残念ながら、匈奴や鮮卑は原語が不明なため漢字表記によらざるをえないが、現在では蒙古がモンゴルに改められていると同様、原語が判明しているのに漢字表記に固執する必要は本来ない。

第二は、原語や自称由来の名称でよぶことは、「中国とその周辺民族」という中国中心の歴史観(その根底には、「民族」であって国家とは見なさない、という未開視や、国家とよぶに足る伝統を持つのは中国だけ、という偏見がある)の見直しにつながることである。

今日のトルコ共和国やトルコ系諸国をいうトルコ、<sup>こんにち</sup>テュルクの語が6世紀のモンゴル高原にすでに現れて、その名を称する国家を建設していることや、チベットに相当する語でよばれる政体と民族が7世紀に出現していることは、〈漢人主導の中国王朝を中心として朝鮮や日本といった漢字文化を共有した国々が並び立ち、その周辺に「異民族」が蟠踞している〉というイメージが一方的なものにすぎないことに気付かせてくれるであろう。

ひるがえってそれは、そのころの日本の国づくりだけを特別視する一国史的な歴史観を相対化することにもつながる。7～9世紀ごろの世界は、トルコ、チベット、中国、アラブ、ビザンツ、フランク、そして日本といった、固有の歴史的基盤を持ち、後代にもまとまりとして存したり文化を伝存させたりした国々が、ユーラシアに一斉に並び立つようになった時期ということが出来る。これは、「中国と周辺の異民族」という東アジア理解や、中国とローマ～ヨーロッパにしか国家伝統を見ない歴史観に代えて、多元的な世界理解につながるものといえよう。

### 3 中国社会の展開を理解するキーポイント

東アジアに目を移そう。巨大な人口を抱える中国漢人社会を理解するための鍵となるのは、国家を支える税役制度と、人々の結び付きの基礎となる親族組織である。

#### ◆ 均田制(給田制)と租調役制(本教科書 p.38、40)

古来、国家がその運営のための資源として徴収するの

が租税と労役、すなわち税役である。農業に基盤を置く中国王朝においては、政権が安定して人口が増えると耕地が不足するようになるが、戦乱が続いて死者や流亡者が増えたり政権が分立して互いに富国強兵を競ったりすると、税役を確保するため、余った田地を給与したり人を募って耕作させたりする策が採られる。戦乱と分立が続いた魏晋南北朝期は、まさにそのような時代であった。

このため、多くの王朝で農民や兵士に土地を給与して税役を納めさせる制度が見られた。なかでも最も知られているのが、北魏に始まる均田制である。従来は一般農民への一律支給の面が強調されてきたが、均田制とは「均等に」配分するのではなく、身分・地位に応じて差等をつけて土地を分配する制度であり、その本質は農地の支給にあったので、給田制ともいう。それゆえ、本教科書では「均田制（給田制）」と並記している。

この給田制と対応して整備された税役制度が租調役制である。制度が整えられた唐前半期において、一般農民の公的負担は租・調・役・雑徭と規定されていた。農民は、税として租（穀物）・調（絹などの布類）を納めるとともに、官庁から割り当てられた労役（役・雑徭）に従事したのである。労役は絹などで代納（庸）することもあったので租調庸（租庸調）ともいわれるが、制度の骨格は税の租・調と労役とである。この点を重視して、本教科書では「租調役制」と記している。

税・役という二本立ては公的負担の大原則であり、明代の一条鞭法も、二本立ての中での徴収方法の銀納化や労役分の合算化であった。このような原則は、労役分（丁銀）を土地税（地銀）に繰り込んだ清代の地丁銀によって最終的に一本化されるまで続いた。

#### ◆ 親族結合：宗族（本教科書 p.23、126、147）

人が社会生活を営むうえで基本となるのが、血縁団体と地縁団体である。とりわけ中国の漢人社会は強固な親族結合で知られ、核となる父系の親族団体を宗族という。

これまでの多くの教科書では、「宗族」は周代の家族関係の概念として用いられてきたが、中国において宗族とよばれる親族組織の活動が目立つ時代は、実は二つに分かれる。一つが周代であり、もう一つは宋代以降で、以後近代までつながる。しかし、これは古代の親族組織が連綿と続いてきたわけでも、古代の親族組織が復興したわけでもないことに注意しなければならない。

周代は身分・職能の世襲に基づく社会であり、その基礎となる父系の親族集団を宗族といった。しかし、このような身分制的社会は春秋戦国期に崩れ、以後千数百年

をかけて、中国社会は血筋ではなく資質や実績によって評価・組織される社会へと進んでいった。宗族が盛んに見られる第二の時期である宋代以降（10世紀～）は、そのような流動的な社会が確立した時期であり、したがってその社会環境下で形成された宗族は、周代のそれとは全く別物と考えなければならない。

宋代以降の宗族形成の背景となった近世の中国社会は、科挙の定着と商業の発達を背景として、競争の活力と脱落への不安とが表裏一体となった流動性の高い社会であり、そのような環境・特質は今日にもつながる。漢人には代々の家業・家督という観念・義務はなく、財産相続は均分だったので、人々は個々人の能力や資力に応じて、科挙受験・商業・土地経営や小作・出稼ぎなどを選択した。このため、社会的・経済的には貧富間の上下移動が激しく、空間的には、土地に緊縛されず恒常的に出稼ぎ・移住が行われた。

王朝はこのような動きに対して放任姿勢だったので、人々は生き残りや社会上昇のために、個別にさまざまな結合を模索した。その一つが血縁を足がかりにした結合であり、親族内の有力者や富裕者を中心に、同族間の結合を強めて相互扶助や資産の維持・拡大のための活動を行った。これが宋代以降の宗族である。近世・近代の宗族は自然に存在する親族集団ではなく、地位や特権が世襲されない社会における生存戦略として、新たに結成されるものだったのである。またそれゆえ、身内に有力者を持たない貧窮層は宗族をつくることができず、相互扶助をうたう白蓮教などの宗教結社に頼ることになった。

このような歴史展開に鑑みて、本教科書では、今日につながる中国社会の特質を理解するうえで重要な概念と考えて近世以降の宗族を取り上げており、宗法や封建と結び付けて説明される周代の宗族は扱っていないので注意されたい。もちろん周代の理解において宗族は重要であるが、宗族という語が重要なのではなく、氏族に基づく封建制を理解することが重要なのである。

以上のように、東アジアと中央ユーラシアという重要な地域の研究動向は大きく動いている。指導要領もそれを踏まえて変化しており、『新詳 世界史探究』は、新動向の要点を押さえて、そのエッセンスを反映させている。

#### 〈参考文献〉

- ・岸本美緒、宮嶋博史（2008、初版1998）『世界の歴史12 明清と李朝の時代』中公文庫
- ・渡辺信一郎（2019）『シリーズ中国の歴史① 中華の成立』岩波新書